

## 地図帳の怪(3)

——地名表記の手引き書をめぐって——

明 木 茂 夫

(承前)

### 一、はじめに

前稿(2)<sup>①</sup>において私は、過去の地図帳が「黄河」と「揚子江」に「ホワン河」「ヤンツー江」という表記を採用していた事実を指摘し、これを口に出して発音する時にはどう読ませるつもりだったのだろうか、という疑問を呈しておいた。「ほわんが」「やんつーこう」とでも読ませようと言うのか、まさか「ほわんがわ」「やんつーえ」でもなかろうにと、まことに不思議だったからである。

ところでその後、内山完造著『そんへえ・おおへえ』<sup>②</sup>をたまたま読み直していたところ、その序文に次のような記述のあることを見いだした。

近頃ラヂオのニュースに人名、地名の現地読みと云ふことが実行されてゐる。そして黄河のことがホワンガと聞える。揚子江がヤンツウガと聞える。淮河がワイガと聞える。この発音は正確ではなくても果して現地読みであらうか。私には疑問である。黄河

はホワンホウで、揚子江はヤンツウチャンで、淮河はワイホウが正しい(厳密ではないが)のではないかと思ふ。(傍線原文ママ)

そうか! 当時のラジオでは本当に「ホワン河」を「ほわんが」と読んでいたんだな! 内山ほどの知識人ならばこれを疑問視するのも当然だろうが、おかげで当時どう読まれていたかが分かった。今となつてはお笑いだが、当時はやはり本気だったようなのである。

内山がここで論じているのはまさに、拙稿で問題にしている現地読み地名であり、現地読みという考え方が当時どう扱われていたかを知る上で貴重な資料であると言えよう。前稿(2)で見たように、帝国書院の地図帳が「ホワン河」の表記を採用したのが昭和三十二年であったことも思い起こしていただきたい。この前後に、黄河や揚子江の表記を現地読み化しようという動きがあったことを示す事実である。

但し内山は、「ホワンガ」という読みがこれ全体で「現地読み」だ、と考えていたようである。しかし私は、「ホワン河」というカタカナと漢字との交ぜ書きを、そのまま「ホワン+が」と読んだもので

はないかと解釈している。そして「揚子江」を「ヤンツー+が」と読んだのは、黄河の一般名詞部分（接尾語）に引きずられたのであろう（「ホワン+が」式なら「ヤンツー+こう」となるはずだ）。一方、「淮河」が「ワイガ」であることは、むしろ普通の音読みそのままなのである。当時のラジオの読み方には、現地読み・音読み・単なる読み間違いが混在したことを、この内山の指摘は示していると感ずる。そしてその状況は現在も大して変わっていないように思う。カタカナ現地音は当時から既に、運用上かくも矛盾に満ちたものだったのである。

内山はさらに続いて、「揚子江」は本来「長江」とすべきことを論じて、次のように述べている。

……呉江の一部の揚子江であるそれを、昔外国人が誤つて長江とか大江とか、又はただ江と呼ぶこの川の全体の名と間違へたのである。ところが日本の地理学者は何でも英文で書いたものでないと信用しなかつたと見えて、イヤ今もそのきらひは沢山にある。

英文とか独文とか仏文とかで書いてないと兎角信用しない癖がある様だ。……（中略）……つまり中国地理を中国文の地理から学ばないで間違つた西洋本で学んだので、同文同種の川の名まで間違つた。つまり孫引きの間違いをしたのである。お恥しいことだが最近訂正せられたとか聞いてやれ／＼と安心してゐるのである。

内山は安心してゐるようだが、しかし「長江」が帝国書院の地図帳に登場するのが昭和五十年以降であつたことは、前稿（2）で見た通りである（但し読みはチャンチャンだが……）。このタイムラグはやはり、「揚子江」の表記が広く普及してすぐには捨て去れなかつたためなのだろうか。地図帳にはこの他にも、これと同様中国語の発音

ではなく、西洋語の綴りに引きずられたカタカナ表記が存在する。これは本稿でもいずれ触れようと思う。

もう一つ、最近の『朝日新聞』『声』の欄に、千葉県の会社員の方による「中国の地名や人名は漢字で」と題する投書が掲載されていたので紹介したい。<sup>(3)</sup>

7年間駐在した中国から6月に帰国しました。娘の試験勉強に付き合ひ、久しぶりに中学地理の教科書を見る機会がありました。その中国の地名には漢字表記はなく、中国語発音を模したカタカナ表記だけでした。私には大きな違和感がありました。

なるほど、投書子は中国駐在の経験者であられる。そうであればこそ、娘さんが地理の勉強で「コワンチョウ」だの「チョンチン」だのと丸暗記（もちろん漢字無しで）させられているのを見れば、なおさら驚かれるのも当然のことである。続いて、

現地の発音に忠実に、という配慮なのでしょう。しかし、カタカナ表記の通りコワンチョウと発音して、広州のことだと分かる中国人がいるとは思えません。北京の日本人学校でも話題になっていました。

とある。これな重要な指摘である。中国の在住経験がある方なら、こうしたカタカナではまず実質的な役には立たないことは、肌で感じられることだろう（もちろん、地図のカタカナは中国語学習のためにあるのではないが）。日本人学校のみなさんも話題にしておられるとは、まことに心強い。

中国では今でも日本の地名や人名は漢字で表記、中国語の発音

で読むことが主流です。日本も漢字で表記、日本語読みでよいのではないでしょうか。

新聞や歴史書など日本社会では、今も漢字表記が主流です。教科書だけが中国で通じないカタカナ表記を行うことは百害あって一利なし、と思わざるを得ません。

おっしゃることは、まことにごもっともである。ただ、「漢字表記が主流」であったはずの日本社会にも、現在ではあちこちにカタカナ現地音主義が入り込みつつあることは、本稿でも論じているごとくである。心ある人がこのことに気づき始めた今こそ、きちんと声を上げねばならないと感じている<sup>④</sup>。

それにしても「百害あって……」とはなかなか手厳しい（まあ新聞の投書というものは担当編集者の手が大き加わっているものだが）。しつこいようだが私は、カタカナ現地音表記にもそれなりの存在価値はあると思っている。中国語ではだいたいこんな風に発音するんですよ、という補助としてなら大変結構だし、我々だってしょっちゅう使っている。しばしばそれを目にしていれば、国際化の世の中、例えば英語の文章の中に中国の固有名詞が綴り字で出て来た場合、カタカナを思い浮かべて、あ、あれのことかなと予想がつく、という効果は期待できよう。但し、漢字はダメ、カタカナのみを正式な表記とする、そしてそれで教科書や地図帳を作る、というのはまずいと申し上げたいのである。そのカタカナ化が確かな語学的裏付けに基づいていないとなれば、なおさらのことである。

## 二、地名表記の手引き書

さて前稿<sup>⑤</sup>では、社会科地図帳の中国地名のカタカナ現地音表記について、実際の教育現場における様々な影響を私の学生諸君に対する聞き取り調査を元に考察し、さらに歴代地図帳の地名表記の細かな変遷の実態について基礎的な調査を試みた。本稿ではこれに続いて、カタカナ現地音表記の指針となった各種文献について調べてみることにしたい。

さて、目下私の探し得た関連文献には、以下のものがある。

a、文部省による通達や手引き書

『社会科手引き書 地名の呼び方と書き方』

昭和三十四年二月十一日『官報』第九六三九号付録

（以下資料a-1とする）

『地名の呼び方と書き方』

『社会科手引き書』昭和三十三年（一九五八）

著作権所有…文部省

発行者…大阪教育図書株式会社

昭和三十四年二月二十日初版発行 157頁

（以下資料a-2とする）

b、aを受けて教科書出版社などが作成した小冊子の類  
『文部省発表（昭和三十三年十二月）  
地名の呼び方と書き方 抜粋』

全国教育図書 非売品 52頁

(以下資料b-1とする)

『社会科手びき書』

地名の呼び方と書き方

一九五八年十二月 文部省』

付 中国標準音の書き方

中国地名・人名の書き方便覧

解説

日本書院 昭和三十四年二月十五日 60頁

(以下資料b-2とする)

なお未見だが、同様の文献に、

『地名の正しい呼び方と書き方』

第一法規出版 昭和三十四年四月 46頁

(以下資料b-3とする)

がある。

c、財団法人教科書研究センターによる地名表記の手引き書

『地名表記の手引』

財団法人教科書研究センター編著

ぎょうせい 昭和五十三年十一月三十日 276頁

(以下資料c-1とする)

『新地名表記の手引』

財団法人教科書研究センター編著

ぎょうせい 平成六年四月十日 310頁

(以下資料c-2とする)

aはカタカナ現地音表記の根拠となる重要文献である。bは基本的に

aの抜粋であるが、そこに付された序文や解説文・付録などに甚だ興味深い記述が見いだせる。cはaの後を継いで、世界情勢の変化を盛り込みつつ、財団法人教科書研究センターが作成した手引き書であり、昭和五十三年に旧版が作られ、これを改訂して平成六年に新版が作られる。この新版が現行のものである。これ以外に、国語審議会の「中国地名・人名の書き方便覧」や議事録等各種記録、内閣告示の「外来語の表記」なども適宜参照する。

### 三、文部省による昭和三十四年の手引き書

さて、まずaの資料から見て行こう。特に本格的な分析が私にできるわけでもない。気になる記述を引用しながら、それに少しずつコメントしてみたい。

資料a-1の官報(図1)はまさに、昭和三十三年(一九五八)に審議決定されたこのカタカナ現地音表記を広く国民に知らしめるためのものである。内容は次の資料a-2の冊子にほぼ対応しており、

前文 資料a-2の「まえがき」を要約して、「です、ます」体を「だ、である」体に直したものを。

本文 一部地名の掲載順序が変わっているのを除き、資料a-2の本文(第1から第4)のまま。

外国地名の書き方 資料a-2の「付表1」「地名の書き方の例」からよく使われる地名を二百九選び、原語の綴りのアルファベット順に配列したもの。さらに「中国の地名の書き方」として三十六例が独立した表として置かれている。



図1 『官報』第9639号付録

この「外国地名の書き方」において「中国の地名」のみが別項目になっているのは、この表全体が綴りのアルファベット順で配列されているために、原語が漢字である中国地名のみを独立させて、漢字の読みのアイウエオ順配列で別表とした、ということである。それはまた同時に、西洋地名をカタカナにすることはそれまでも普通であったのに対し、中国地名を全てカタカナ化することが当時においても目新しいやり方であったことを示しているように思う。

資料a-2の『地名の呼び方と書き方』《社会科手びき書》(図2)は157頁から成る手帳型の冊子で、まさに関係者が常に参照するためのハンドブックである。22頁までが本文で、残りは「付表」と「付録」である。本文、「付表」、「付録」の内容は以下のごとし。

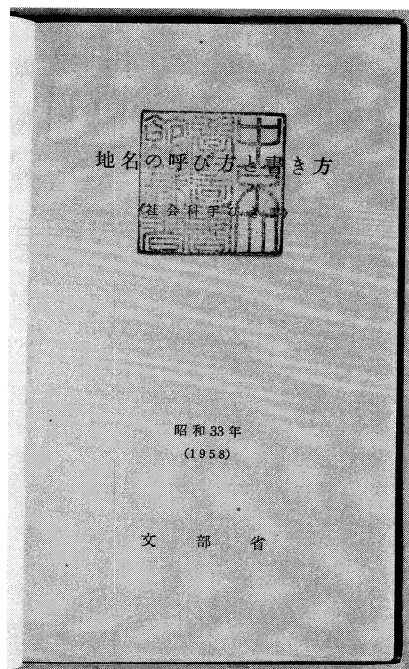
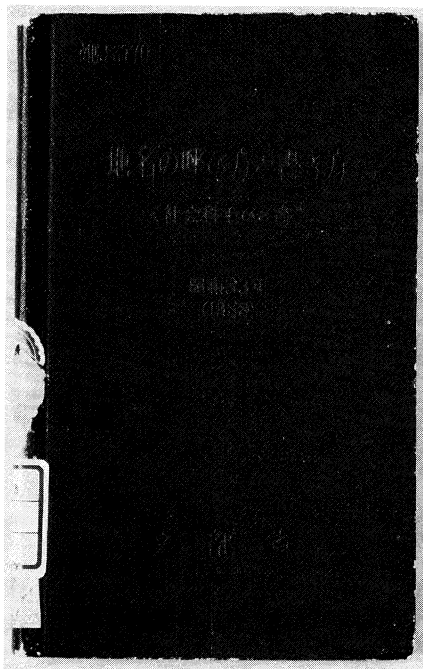


図2 中京大学図書館所蔵本『地名の呼び方と書き方』(表紙ととびら)

第1 地名の呼び方と書き方に関する方針

第2 一般外国の地名

第3 中国・朝鮮ならびに樺太および千島の地名

第4 日本の自然地域名称

〔付表〕

1 地名の書き方の例

2 国の名称とその書き方

3 日本の主要自然地域名称の書き方

〔付録〕

1 地名の書き方に関する資料

2 公用文作成の要領——第1 4 地名の書き表わし方

3 外国の地名・人名の書き方（案）

4 中国標準音の書き方

5 外国地名及人名取調 明治三十五年十一月十五日付、官報第

五八一号附録

資料a-1とa-2については、本文はほぼ同一、その他はa-1がa-2の抜粋となっているので、以後特に必要のない限り両者を区別しない。

さて、資料a-1『官報』の前文は、地名の呼び方と書き方の経緯について次のように述べる。

地名の呼び方と書き方にはいろいろの方式があるため、初等中等教育の段階における児童・生徒の社会科学学習が予想以上の障害を受け、学習効果を高めるうえで一つの支障になっていた。そのため昨年十二月、文部省では、外国の地名およびわが国の主要自然

地域名称の呼び方と書き方について一つの標準を示し、小学校・中学校および高等学校における社会科学学習指導の手びきを作成した。そこで、資料付録としてかかげ、一般の参考供することとした。

新しいものを導入しようとする人がその前の障害をことさらに強調するのはよくあることだが、ここで言う社会科学学習における「予想以上の障害」というのは、当時具体的にどのようなものだったのだろうか。例えば本文第2「一般外国の地名」の「細則」には、

「ヂ」「ヅ」「キ」「エ」「ヲ」「ヅ」の文字は用いない。

として、

カンボジア（カンボヂア<sup>x</sup>）

ウィーン（キーン<sup>x</sup>）

ウエリントン（エリントン<sup>x</sup>）

などの例が挙げられている。これは、現代仮名遣いが採用された以上、それに合わせた表記にしないと学習の障害になるということだろう。一方、

イタリア（イタリヤ<sup>x</sup>）

ロシア（ロシヤ<sup>x</sup>）

フィリピン（フィリッピン<sup>x</sup>）

チリ（チリー<sup>x</sup>）

などの例は、まあ今風な書き方に統一するということで、同じ地名に呼び方が複数あるのが障害になる、という考え方だと思われる。また、

チューリヒ（チューリッヒ<sup>x</sup>）

スタンリー (スタンレー<sup>x</sup>)

グレー (グレイ<sup>x</sup>)

ホイートランド (ホイートランド<sup>x</sup>)

といった例も挙げられているのだが、これらは必ずしも定着しなかったようで、「×」がついている方の書き方も現在見ないわけではない。「ホイートランド」についても現在決して標準的な書き方となっていないように見えるが、地図帳でこう書くのは、英語地名の書き方の原則として、

whea, whiなどは「ホイ」と書く

と定められている、つまり「ウィー」は一律用いないと定められているからなのである。こういった細かいところまで統一しようとしたわけだ。他にも、

語頭の Ye, Je は「エ」と書く。

という原則があつて、そのため、

エローストン (イエローストン<sup>x</sup>)

となっているのである。今日「エローストン」なんて言う人はおるまい。しかしこの手引きは「イェルサレム」を「エルサレム」と書く以上、「イエローストン」も「エローストン」でなければならぬ、と考えておられるようなのだ。<sup>(6)</sup>とにかく統一がお好きだったようである。そしてこのようなこだわりは、耳で聞いた音声よりも、目で見た綴り字の方を意識したもののように見える。この点は後で触れるので、ご記憶願いたい。

同様の細かい原則は他の言語にも定められていて、例えばフランス語では、

ille, illes は「イユ」と書く。

という原則が定められており、ゆえに、

マルセイユ (マルセイユ<sup>x</sup>)

となっている。これも「×」のついた方を現在もしばしば見かけるような気がする。

まあこれらの例は、複数の書き方があつては子供の学習の障害になるから一つに統一しよう、ということだと考えれば、まだしも理屈が通る。もちろんその程度のことだ障害になるかどうかはまた別問題だが<sup>(7)</sup>。一方、中国の地名はどうだろうか。

本文第3「中国・朝鮮ならびに樺太・および千島の地名」の「原則」には、はっきりこう書いてある。

中国・朝鮮ならびに樺太・および千島の地名は、かたかなで書く。ただし、慣用として広く使用されているもの、その他必要のあるものについては、漢字を付記する。<sup>(8)</sup> (傍線明木)

これこそが、中国の地名には漢字を使わないでカタカナで書く、必要がある場合も「付記」するだけ、というカタカナ現地音主義の宣言である。全てはここに始まったのである。

ここで面白いのは、原則1、及び細則3に、

中国 (チュンクオ)

と明記されている点である。これからは「支那」と言つてはいけません「中国」と言いましょう、いや「中国」もやめて「チュンクオ」にしましょう、と本気で考えていたのだろうか。いや、こんなものが定着しなくて、よかった……。一方、「朝鮮」はそのまま「朝鮮」である。この時点では方針が不統一だったのだろうか。さらに、

中華民國

中華人民共和國

大韓〔だいかん〕 民国

朝鮮民主主義人民共和國

となっている。さすがに、これにカタカナ現地音は無理だろう。「中華人民共和國」など「チョンホワレンミンコンホークオ」という訳の分からんものになってしまう。「大韓」は「だいかん」と読むようわざわざ指示を入れている。(チュンクオ)と「だいかん」のカッコの違いが分かりにくい、これは

(一) は、別名を意味する。「一」をつけたひらがな書きは読み方を示す。

と注記されている。「大韓」はカタカナ現地音ではなく音読みで読めと、わざわざ断っているわけだ。そして「チュンクオ」というのは別名なのだろう。但し、この項目では「中||チュン」としていることにご注目いただきたい。実は、資料2-bが〔付録〕に掲げる中国語音の一覧表では「中||チュン」となっていて、同じ本の中で矛盾しているのだ。カタカナ現地音を巡ってはこのテの不備はしばしば見かけることではあるが、「チュンクオ」というカタカナとしても特殊な表記を「別名」として用いる、という何か特別な意図があったのであるうか。これについては、資料cの項で再び触れる。

さらにここには重要な規定がある。本文第3「中国・朝鮮ならびに樺太および千島の地名」の細則5である。

山・山脈・湖・湾・半島・盆地などの接尾語は、漢字で書く。

江・水・河・溪は、川に統一する。また、山地名で嶺の字のつく

ものは、それを原音で読みこんで、その次に山脈または山地をつける。

山や川が「接尾語」と言えるかどうかは微妙だが、それはともかくとして、地図帳の「ウェイ川」だの「ホワイ川」だのという特徴的な書き方は、ここから始まったものであった。地図帳が独自の判断で始めたものではなく、文部省の明確な指示があつたのことだったのだ。

では「ワンリーの長城」や「ター運河」は？ 実は資料aには特に掲載されていない。資料bにも後の時代の資料cにも見あたらない。おそらく地図帳編集者の個別の判断によって、この細則を建造物である長城や運河にも適用したのであろう。地図帳によって表記にブレがあるのも、そこに原因があると考えられる。

以上、このaの資料を見て感じたことをここで整理しておきたい。この手引きが目指した「障害」の解消とは、西洋など非漢字圏の地名においては、書き方のブレの統一、および現代仮名遣い(「外来語の書き方」を含む)の適用、ということであつたと考えられる。ところが中国の地名についてはどうだろう。西洋の地名ならば、「イエローストン」が「エローストン」に改められても、まだしも見て同じものだとかかる(変だけど)。しかし中国の地名については、今までの「四川」が「スーチョワン」に改められるのである。漢字無しである。これは、国民にとって非常に大きな変化だったはずだ。カタカナだけで書かれた場合、従来の知識との対応が取れなくて、一から覚え直さねばならなくなる。そこで先輩方に当時の様子をお聞きしたところ、そのような大きな変化はあまり記憶にないという答えが返ってく



る。どうやら世間的には、中国地名をカタカナ書きするというのはほぼ無視されてしまったようだ。しかし地図帳はこうした手引き書に従って直ちに改訂され、その表記は基本的に今日に引き継がれているのである。ここに、教科書・地図帳の表記と世間の呼び方との乖離が始まったと言える。

考えるに、漢字で書かれる中国の地名について、漢字を廃して現地音方式のカタカナで書け、というのは右の非漢字圏のカタカナ地名の例とは全く性質が異なるのではないか。理屈をこねるならば、漢字で書いて従来どおり読む、というやり方である限り、基本的にカタカナ言葉ほどのブレはなかったはずである。当用漢字体を使い、現代仮名遣いで読みを表記せよ、といのならば、非漢字圏のカタカナ地名に準じた扱いを漢字圏の地名にも適応したということになる。しかしこれはそれを超えて、いきなり現地読みのカタカナで書け、漢字で書くな、というわけである。

これを要するに、非漢字圏のカタカナ地名について学習上の障害となるのは、表記のブレ、そして現代仮名遣いへの対応、ということである。一方、漢字圏の地名についてはどうか。従来の表記法におけるブレは全く問題になっていない。この手引きが学習上の「障害」とみなしたものは何か……。実は漢字の存在そのものだったと言えはしないか。つまりここに見え隠れしているのは、漢字は子供に難しい、漢字があるから悪いのだ、という漢字廃止論・漢字制限論の影なのではなからうか。

#### 四、教科書出版社による小冊子

次にbの資料を見てみよう（図3、図4）。日本書院の資料b-2が昭和三十四年二月十五日、第一法規出版の資料b-3が同年四月の発行である。全国教育図書資料b-1は、表紙に

文部省発表（昭和三十三年十二月）

とあるのみで、この本自体の発行年月は記されていない。しかし同じ時期と見てまず相違なからう。

資料a-1の官報が昭和三十四年二月十一日付で、資料a-2の『地名の呼び方と書き方』が昭和三十四年二月二十日発行であったから、資料bはこれとほぼ同時に（一つはむしろ数日早く）発行されたものであることが分かる。資料bは基本的に資料a-2と同じ内容もしくは抜粋であり、いずれも五十頁前後の小冊子であるが、しかしその編集や印刷にはそれなりの時間がかかるはずである。つまり、資料bは資料aの出版を受けて作られたものではなく、おそらく昭和三十三年十二月の文部省からの発表に従って直ちに作成され、文部省が直接の著作者である資料aと同時期に、相次いで発行されたものだと考えられる。

資料b-1は表紙に「抜粋」とあるが、具体的には資料a-2の本文全文と「付表」3をそのまま収録した上で、さらに資料a-2とはやや異なる「地名の書き方の例」を掲載している。資料b-2は総六十頁であるが、やや小さい活字を用い行数を増して、資料a-2の全文を掲載し、さらに独自の解説を加えている。

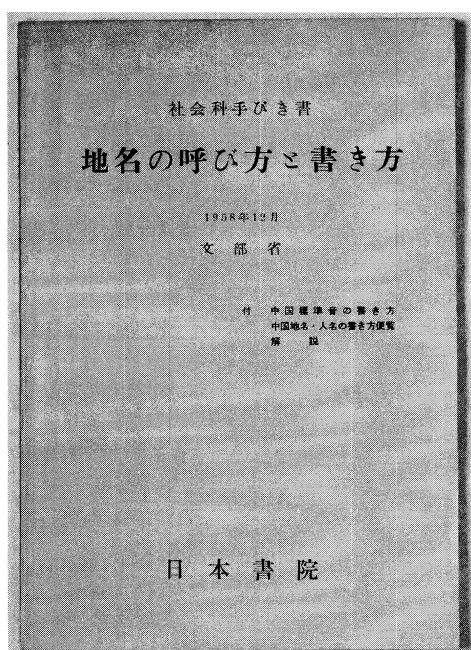


図4 日本書院版冊子

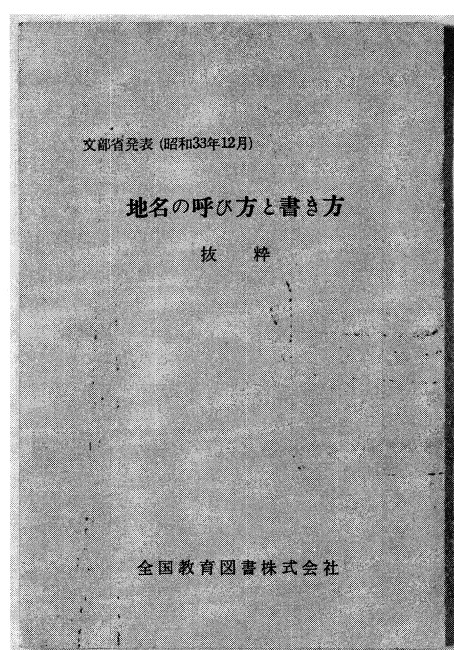


図3 全国教育図書版冊子

さて、bの資料についても少しずつ見て行きたい。まず資料b-1の「序 地名の呼び方と書き方はどう変るか」に、次のようにある。

今までは「地名の呼び方と書き方」は、それぞれの立場から各種の方式が採用されていたので、最も大切な教科書に於てすらその呼び方と書き方がまちまちでありました。

そこで文部省が教材等調査研究会中学校高等学校社会科小委員会の審議を経て地名の呼び方と書き方の統一をはかる事になりましたので既に新聞等の報道関係や教科書の一部では改訂された地名が使用されております。

この事は今まで使用されていた地図が来年四月以降の教科書と合わなくなり、今迄の地図を全部買い直さなくてはならぬ事になりますので、先生方にとつても、又私達地図の出版社にとつても大きな問題であります。

私達は今、従来発行していた地図の改訂に懸命の努力を続けておりますが、一体地名がどんな風になるのかと云う事を小冊子にまとめておわちいたします。

幸いにしてこの試みが諸先生方のご参考に供する事が出来れば望外の喜びとする所であります。(傍線明木)

今までの地図帳が使えなくなつて、全面的に改訂しなければならなくなつたことは、当時は非常に大きな衝撃だったことだろう。そのことは現在の我々が考えても、想像に難くない。

またその次のページの「地図の購入予算と地図の選択について」には、次のようにある。

本冊子収録のように数多くの地図の呼び方が改訂されますの

で、今まで使用されていた地図（軸）は全部買いなおさねばならなくなりますが、その購入に当っては下記の点に特にご留意下さい。

必ず予算に計上して置くこと。

……（前略）……昭和35年度教材購入予算編成の時に忘れず地図購入費を計上しておいてください。

必ず地名の訂正された地図を選ぶこと。

数多く発行されている地図の中には地名の訂正されていないものもある筈です。従って地図を選ぶ際には地名が訂正されているや否やをお確かめください。

全教の地図は全部地名が訂正してあります。

全国教育図書では多大の犠牲を払って地名を全部訂正しておりますから、全教の地図なら安心してお使いになれます。

……（以下略）……（太字原文ママ）

なるほど、ここでは自社の地図が全てこの新しい地名表記に対応していることをアピールし、自社製品の採用を教員に薦めている。つまり、教員が参照するのに便利な冊子として各学校に配布し、自社の宣伝を兼ねるという営業上の目的から制作されたものである。「非売品」となっているので、無料で配布されたものであろう。このような地名の改訂が学校関係者に与えた影響の大きさがうかがえる。

資料b-2にはそうした営業目的の文言は見あたらないが、同様に地図表記の全面改訂への注意を喚起しおり、とびらの次のページには次のような前書きが置かれている。

本書に収録した社会科の手びき書「地名の呼び方と書き方」

は、昭和33年12月文部省が教科書発行所に説明されたもので、これは昭和36年度以降の新しい教科書（小学校・中学校・高等学校）に適用される意図のものであります。

呼称・表記の細部にわたっては疑義を持たれるむきもあらうかと考えて、「付録5」以下の「中国標準音の書き方」、「中国地名・人名の書き方便覧」および小社編集部による「解説」を付しました。（傍線明木）

いや、確かに疑義も持とうというものだ。突然、これからはこれで行けと言われたんだから。資料b-1には「昭和三十五年度」の「予算編成の時」とあり、資料b-2には「昭和三十六年度以降」の「教科書」とあることから、改訂された地図帳の使用開始時期が分かる。但し、それより前の地図にも既にカタカナ現地音表記による地名が用いられていたことは、前稿（2）で既に指摘した通りである。

ともあれ、これらの冊子は文部省の通達を関係者に周知させるためのものであったわけである。よってその内容は基本的には資料aと全く変わらないもののだが、実は面白いのは、この冊子の出版社によって加えられた序文や解説文なのである。ここからいろいろな情報を読み取ることができる。

資料b-2が前書きで「小社編集部による『解説』と呼んでいる、巻末54く60頁の「地名の呼び方と書き方（解説）」を見てみよう。冒頭54頁の「手びき書編集の趣旨」（1）には次のように書いてある。

社会科の学習指導上、地名の呼称と表記は現在まちまちで、学習上支障をきたしているため教育的見地から一つの基準を示したも

のである。少なくとも小・中・高等学校では同じ原則で貰われることが望ましいと考えて、小学生の能力も考慮して平易にしたものである。(傍線明木)

これは一体何を言っているのだろう。西洋など非漢字圏の地名をカタカナで表記する場合、小学生の能力をそれほど考慮しなければならぬとは思えない。この記述は、やはり漢字圏の地名を念頭にしたものだと私は解釈した。すぐ次のページには「漢字に対する能力を考慮した」とある。

その場合、中国地名に使われる漢字は小学生には難しい、というのならまだしも話は分かる。だがここは、それを考慮して平易にした、しかも小中高通じて同じ原則で貫く、と言っているのである。つまり、中高も小学生並みにそろえるために、漢字をやめてカタカナにしたんだと、ここはそのようにしか読めない気がするのだが、いかがなものだろう。もしそうだとしたら、これは正気の沙汰ではない。高校生のお兄さんお姉さんが小学生よりも難しいことを勉強するのは当たり前のことではないのか。子供たちの教育より、表記の統一(漢字制限)を優先させる考え方である。

これに関しては、後の方に興味深い記述が見える。第3「中国・朝鮮ならびに樺太および千島の地名」の(2)に曰く(57頁)、

原則3に「慣用として広く使用されているもの、その他必要のあるものについては漢字を付記する」とあるが、これは漢字を覚えさせるためではなく、ロンドン(London)と同じように原語として付記するもので、小学校ではかたかなを、中学校になつてかたかなに漢字を付記すればよい。もちろん原語として付記するの

で、当用漢字にない中国漢字もある。しかし略字《例(九龍→九竜)》を使つてもよいとした。ただ、国語学の見地では正確かどうか疑問があるから、使用の可否は常識によりたい。(太字原文ママ)

当用漢字にない漢字が即中国漢字とは限らない、「龍」が中国漢字で「竜」がその略字だとは言えないなど、細かいツツコミを入れたくなるが、やめておこう。「漢字を覚えさせるためではない」とわざわざ断っているのは、漢字廃止論・制限論が頭にあるためか。地図や教科書に出てくる地名全てが暗記するためのものだとは限らないのは、当たり前だと思うのだが。ここで注意すべきは、小中は「かたかな」(つまりカタカナ現地音表記)で統一する、漢字は単に添え物だ、西洋語の綴りと同じ扱いだ、と念を押していることである。漢字を西洋語の綴りと同じとみなす、このことはカタカナ現地音表記の素性を考える上で非常に重要な要素なので、ご記憶願いたい。

さて「手びき書編集の趣旨」に続いて、「手びき書作成の基礎になつたもの」の(4)にこんなことが書いてある(54頁)。

本来地名の呼称は文字を本体とするのではなく、発音を本体とするものであるから、その表記には漢字を用いないでかなを用いる。(傍点原文ママ、傍線明木)

ちよつと待つて欲しい。地名の本体が「文字ではなく発音だ」などという前提が一体どこにあると言うのか？<sup>1)</sup> そうか、全ての元凶はここにあったのだな。

ある地名がどういう文字でどういう綴りで書かれるか、ということも現地の人にとっては歴史的財産であろう。発音さえ正しければ綴り

はどうだつていい、とは西洋人は考えまい。また東洋では「東京」と書いて、日本人は「とうきょう」と読み、中国人は「Dong jing」と読む。発音は違つていても文字が共有される。この場合、地名の本体は文字だということになる。例えば、古くは日本語でも外国の地名を漢字で書いた。「エジプト」は「埃及」と書き、中国語でも同様に「埃及」と書く。日本語では漢字で「埃及」と書いても読む時は「エジプト」と読んだ。漢字の音読みで「あいぎゅう」とは読まなかった。ところが中国ではこれを漢字音で「ai ji」と読む。「Egypt」に近い読み方をわざわざすることはない。つまり、地名の本体が文字か発音か、なんてことは時と場合によつて変わるのである。日本語で「埃及」と書いて「エジプト」と読む場合、これはその本体が「読み方」である例だ。一方中国語で「埃及」と書いて「Ei」<sup>12</sup>と読む場合、これはたとえ当て字であつても地名の本体が「文字」として扱われる例だ（中国語では漢字で認識するしかないのである）。そうした言葉というものの多様性をばつさり切り捨てて、地名の本体は発音だなどと脳天気を決めつけて、はたしてよいものだろうか。いや、そんな屈は子供たちには難しいなどとおっしゃらないように。多様性を認めて普通の読みをする方がよほど明快、見慣れないカタカナに統一する方が却つて混乱を来す、そういう可能性も考慮しなければならない。

ところがよく見ると同じ54頁、このすぐ前の(2)には、

小・中・高等学校の社会科教科書および地図帳（中国・朝鮮・樺太・千島をのぞく）をとりあげ、その呼称と表記を検討した。

（傍線明木）

と書いてある。つまり、この「発音を本体とする」というのは中国を

含まないことになる。いや、それならべつに問題はない。これからの日本語では「埃及」ではなく、カタカナで「エジプト」と書く、といったことさえ守ればよいわけだ。しかしその後ろの55頁には、

一般外国地名はかな書きする方針をとっているので、中国・朝鮮・樺太などもかたかなで書くようにしてある。従来の中国その他の地域の地名は、当用漢字にもないむずかしいものが多く、学習上に大きな障害になっていた。（傍点原文ママ）<sup>13</sup>

とあり、明らかに中国もその対象となつていて、矛盾しているように見える。さらに55頁の第2「一般外国の地名」の(1)には、

地名は原則としてかたかなで書く。外国地名については取り扱いの便宜上、中国・朝鮮・樺太・千島はわが国との歴史的関係などから、地名の表記については他の外国とはちがつたいろいろの問題があるので、これを区別して取り扱っている。（太字原文ママ）

とある。どこかこねない日本語だが、要するに中国などは一般外国と別扱いだ、ということのようで、またまた矛盾している。もう一度最初から読み直してみると、右で挙げた(2)はその前の(1)、即ち、「外国の地名・人名の書き方」（昭和二十一年三月文部省）と「外来語の表記」（昭和二十九年国語審議会）との原則を比較検討し、その問題点を明らかにした。

とあるのを受けて、その文部省と国語審議会の指針の内の中国・朝鮮・樺太・千島をのぞいた地名について検討した、ということらしい。つまり中国の地名をカタカナ現地音で書くことはその指針どおり、ということなのである。結局、中国は別扱いにしたが、その従う

先はカタカナ現地音表記だ、と言いたいらしい。

このあたりの独特の読みづらさを見ると、この「解説」は文部省による各教科書出版社への説明をメモしたもの、或いは席上資料として配付されたものを、解説としてそのまま列挙して盛り込んだもののような感じがする。資料b-1-2の前書き（とびら裏面）に

昭和33年12月文部省が教科書発行所に説明されたもの

とある。まさにその席上での説明が、この解説に反映されているのではないか。そうではないにせよ、各出版社が文部省の意図を曲げて解説を書くことはあり得ない。

資料aの文部省『手びき書』自体は、見ようと思えば誰でも見ることが出来る。しかしそれを発表した際の説明会での細かな説明や資料は、現在なかなか目にするのではない。その意味では、出版社による資料bの「解説」は、aの『手びき書』の意図を解き明かすのに有益な資料となるかもしれないのである。

そう考えると、気になるところはいろいろある。資料b-1-2、54頁

「手びき書作成の基礎になったもの」の(6)に、

地名の表記は、なるべく国民にとつて受け入れやすく、親しみやすいような方向にする。

とある。親しみやすいかどうかということはそんなに大きな基準とすべき事なのだろうか。それに、こんなカタカナが受け入れやすく親しみやすいものだととても思えない。それは私の好みの問題ではない。なぜそう言えるのかは、これまで續々述べてきた通りである。

また資料b-1-2の第1「地名の呼び方と書き方に関する方針」の(5)には、次のようにある(54～55頁)。

漢字に対する能力を考慮した

学習効果の上から、漢字はなるべく簡略化した方がよいが、国語政策上からその限界線をどうするかに問題があり、生徒の漢字に対する能力を考慮している。(太字原文ママ、傍線明木)

持つて回った言い方をしているが、要するに、漢字は子供には難しい、と言っているに等しい。漢字廃止論の決まり文句である。そこで子供の能力をバカにしかかかってよいものか。「子供の人權」なんて言葉は当時なかったであろう。

他に気になる記述を挙げるならば、資料b-1-2の「解説」第3「中国・朝鮮ならびに樺太および千島の地名」の(1)に次のようにある(57頁)。

中国の地名はウエード式表記に基いたかな書きによって書く。  
(太字原文ママ)

これはまた、いささか理解しがたい。ウエード式に基づくのが何式に基づくのが、問題はそれが表すところの標準音声なのではないのか。ここには中国語の音声、をできるだけ正確に表すようなカタカナとは一言も書いてない。ウエード式のローマ字に基いたかな書きだと、はつきり書いてあるのである。

ではおたずねする。ウエード式に基づいたカタカナと、国語羅馬字式に基づいたカタカナ、さらには注音字母に基づいたカタカナとは、違うものが出来るんですか？何式に基づくかと、それが表記する音声は同じものだ。それぞれ書き方が違うだけなのである。だから、「何式のローマ字」に基づいたかということにあまりこだわる必要はないはずなのだ。どうも地図帳のカタカナ現地音表記を作った

人々の中には、このように「表記」ということとそれが担う「音声」ということの区別がついていない人がいるようなのである。先ほど a 12 のところで見た、

語頭の「Ye」「Je」は「エ」と書く

ゆえに

「イエロー」ではなく「エロー」

ということなども、音声ではなく綴りの方に合わせた書き方だと見ることができよう。綴り<sup>イコール</sup>音声という考え方である。

もちろん、カタカナ表記を統一することなど不可能で、いろいろな書き方が生じて当然だ。しかしその原因が、実際の音声と関係無しに、綴りの違いに引きずられたことにあるとすれば、それは実におかしな話なのである。日本語に無い音声を、いろいろなカナ書きで工夫して書く、その工夫の仕方から来る差異ならば、まだしも納得が行くのだが。

後で触れる資料 c 1 1 と c 1 2 では、この「ウェード式」が現行の「拼音(ピンイン) 方案」に変更されている。しかしこの辺の危うさは相変わらずで、

中国地名の仮名に、必要に応じ「て」原音を参考にする場合は、ローマ字を音標文字として利用した中国語のつづり方である拼音(ピンイン) 方案による。(「」内は c 1 2)<sup>(14)</sup>

と書いてある。しかし、拼音ローマ字の綴りを添えたところで、それが直接「原音」を添えたことにはならない。「延安」<sup>えんあん</sup>に「Yanan」と添えても、中国語の知識のない人は「ヤンアン」「ヤナン」と読んでしまうことだろう。「咸陽」<sup>かんよう</sup>に「Xianyang」と添えたところで、「ク

シアンヤング」「クシアニヤング」としか読めないことだろう(もちろん中国語はそんな発音ではない)。これは単に、中国のローマ字ではこう書いていますよ、という注記にしかない。原音でどう読むかの保証はできないのである。

いや、世間では実際にそのような間違いは起こっている。張戎の『マオ 誰も知らなかった毛沢東』<sup>(15)</sup>の著者表記が「エン チアン」になつていたことなど、その有名な例である。<sup>(16)</sup>「張戎」という字の読み方は、

ウェード式ローマ字では Chang Jung

漢語拼音方案式ローマ字では Zhang Rong

とそれぞれ表記される。英語式に姓と名をひっくり返して「Jung Chang」である。ここで重要なのは「Jung」と書いてあっても「rong」と書いてあっても、それが表す音声は同じだ、ということなのである。「chang」と「zhang」も同様<sup>(17)</sup>。「Jung」と「rong」では見た目がずいぶん違うと思われるかもしれないが、いや、実際どちらとも書ける音なのだ。「Jung」なら「ジュン」や「エン」、「rong」なら「ロン」、という区別など最初から存在しない。もしも地図帳式カタカナ現地音表記で書くならいずれも「ロン」となる。これを喩えて言うならば、

訓令式で

sa	si	su	se	so
ta	ti	tu	te	to
sa	shi	su	se	so
chi	tsu	te	to	

と書くからといって、日本語に

サス、イスセソ と サシ、スセソ  
タテ、イトウテト と タチ、ツテト

という区別がある、ということには絶対にならない。それと同じこと  
だと言えよう。

さらに、57頁の(12)には、

第3の原則1に示されているそれぞれの標準音とは、中国の地名  
は昭和24年3月国語審議会建議「中国地名、人名書き方の表」  
を、朝鮮の地名は、韓国代表部発行の地図(英文)によつてい  
る。(原文ママ)

と書いてある。私は韓国語は専門外だが、韓国語の標準音が「英文に  
よつている」と簡単に言つてしまつてもよいものなのだろうか。韓国  
語のローマ字表記(しかも複数の書き方がある)、そしてハンゲル、  
それらに基づいて決められた現地読みカタカナが、それぞれ異なるの  
だろうか？(ヒョンデーとヒュンダイのごとく……)

もちろん、ここで触れられている昭和二十四年三月国語審議会建議  
「中国地名、人名書き方の表」は、その点はきちんと理解していて、  
ローマ字の綴り方に引きずられたような誤謬<sup>ごびゅう</sup>は全く見られない。た  
だ、地名表記の解説がこのように素朴に表記(綴り)とそれが担う音  
声(発音)とをごっちゃにしているのを見ると、非常に不安になつて  
しまう。結局、何式のローマ字を用いたのかは、カタカナと音節との  
対応を検索する場合に必要な情報なのである。カタカナ表記が直  
接ローマ字から作られるはずはないのだ。

ついでながら、この国語審議会の昭和二十四年の「表」がはつきり  
と「地名・人名」としているのに対し、同じ57頁の(1)では、

これ(国語審議会の表、明木注)については「テイ」を「チ」  
に、「トウ」を「ツ」にしたこと以外に差異はないが、人名には  
適用せず地名のみにする。(太字原文ママ、傍線明木)

となつてゐる。これは、カタカナ現地音表記というものが昨今言われ  
るような現地の人々への配慮ということでは必ずしもなかったことを  
臭わせる事実である(もし現地の人々への配慮であれば、むしろ人名  
の方が大切なはずなのだ)。やはり国語・国字政策(漢字制限)との  
関連が大きかつたのではなからうか。

この解説部分には他にも重要な記述がいくつもあつて、例えば57頁  
の(11)には、

中国歴史上の地名は、歴史上の呼び方でさしつかえない。(清朝  
までをいう) (太字原文ママ)

と書いてある。ははあ、現在の歴史教科書の多くが、民国以降の人名  
はカタカナ現地音を添え、清朝以前の人名は音読みになつてゐるの  
は、これのせいだったのだ。<sup>(18)</sup>しかしこれも、実は混乱の元になつてい  
るのである。「歴史上の地名」というのは、歴代呼び名の変つた場  
合を指すのか？ それなら「長安」は「ちようあん」、「西安」は  
「シーアン」と使い分けるようなことを指して言うのである。しか  
し地名の変わつていないところは？ 「洛陽」は、昔の話に出てきた  
ら「らくよう」で、近代の話に出てきたら「ルオヤン」なのか？<sup>(19)</sup>

私がお話をうかがつた高校の先生方の間でも意見は分かれていて、  
時代に関係なく「地理」で出てくる地名はカタカナ、「歴史」で出て  
くる地名は音読み、という先生もおられれば、「地理」であろうと  
「歴史」であろうと、清朝以前は音読み、民国以降はカタカナ、とい



う先生もおられた（地理にも歴史にもカタカナはあまり意識していないという先生もおられる）。そもそも、科目によつて同じ地名の読み方が変わるというのも、学校という狭い業界だけで通用する話であつて、外の世界ではなぜそのようなことをする必要があるのか理解されにくいことであろう。やはり、時代で区切つて呼び方を変えるというアイデア自体に無理があると言わざるを得ない。<sup>(20)</sup>

57頁の(6)には、

満州は中国東北区とも呼んでいるが、わが国において慣用の強い呼称であるばかりでなく、奥羽地方（東北地方）と混同しやすいので、この不便さをさけて満州としている。（太字原文ママ）

とある。その理屈なら、「中国」は日本の中国地方と混同しやすいので「支那」とする、ということにもなりそうな気がするが……。またそのすぐ後の(8)には、

揚子江は資料では「ヤンツー川」または「ヤンツーチャン」である。今回は「揚子江」（ルビィようすこう）というようになつたが、中国の現地では、それは「長江」といわれ、中国の地図にもそのように記されている。しかし、今回は中国の呼称より日本での慣用によつた。（太字原文ママ）

とある。これらについては、後には「満州」はダメ、「東北地方」と言うべし、「揚子江」はダメ、「長江」とすべし、となつたことは周知のごとくである。実際の地図帳の表記も、それにシンクロして改訂される。満州については昭和二十年代に「満州」の表記がわずかに見られた後、昭和三十年くらいまで「東北行政区」の語が用いられることがあり、その後は「東北（トンペイ）」の表記が見られるようになる。

る。一方「揚子江」に代わつて地図帳に「長江」が導入され始めたのは昭和五十年以降のことである。

また57頁の(7)は、次のように述べる。

手びき書（資料a-2を指す、明木注）では、広東市の場合に国際慣用で「カントン」と表記されるようになっていたが、広東省、広西省は「コワントン」、「コワンシー」ではなく、それぞれカントン省、カンシー省とすることにした。広州は「コワンチヨウ」とした。

広州とは別に広東市なるものをわざわざ立てるなど、何かこの項目の記述自体が混乱しているように見えるのだが、それを受けてか、昭和二十〇三十年代の地図帳の表記も、

カントン（広東）

コワンチヨウ（広州＝広東）

コワンチヨウ（広州）

コワンチヨウ（広州）（カントン）

とバリエーション（むしろ混乱）がある。また、見た限りでは省の表記なのか市の表記なのか地図上で分かりにくかつた。

もちろんこれら個々の注記の多くは、現在では通用しない。満州か東北かというのも、既に過去の問題である。しかし、ここに見えるこうした地名表記への独特のこだわり方というのは、現在も変わっていないように見える。むしろこのように、その時その時の事情で細かく表記を改訂して行くことが、地図帳の地名表記の不統一や分かりにくさを招いていると言えるのではなからうか。

その他にも細かい疑問点は多く、例えば第2「一般外国の地名」の(3)に次のようにある(55頁)。

地名はなるべくその国のとなえ方により、現地呼称を尊重することが第一であるが、慣用として熟しているものは例外としてみとめている。例えば Ye は「エ」と書くが、Yemen は新聞ではイエーメンであり、外務省はイエメンとなっている。手びき書の細則によるとエメンとなる。ことばは地理教育だけではなく生活全体の中で用いられるものであるから、慣用から遠ざかったエメンより、そして長音符号ははっきりしたもの以外はできるだけ省略するうえからも、イエメンにしたほうが適當である。(太字原文ママ)

「Yemen」が「エメン」というのは、先ほど資料 a-2 のところで触れた、「Ye」は一律「エ」と書くというやつから来ている。さすがに地図に「エメン」とは書けなかったと見える。「綴り」に従ってカタカナを定めるのか、「音声」に従ってカタカナを定めるのか、ということをごっちゃにしてきたツケがここに回ってきたと言えよう。<sup>(2)</sup> それにしても「ことばは地理教育だけではなく生活全体の中で用いられるもの」などと、この解説者にだけは言われたくない。地図帳の中しか通用しない特殊な表記をさんざん作っておいて、よくもそんなことが言えたものだ。これに続いて、次のようにある。

同時に「Jo」は「ジョ」であるが、ヨルダンではなく慣用にしたがってヨルダンとする。

ちよつと待て、「ジョ」というのは英語式の読みではないのか。慣用に従う、と寛容な態度を見せているが、本来は機械的に「Jo」は

「ジョ」とすべしという前提がやはり彼らの根底にあるのだろうか。

同じ55頁の(2)にも面白いことが書いてある。

慣用の熟しているもの、例えば沿海州をプリモルスキーにした<sup>(3)</sup>り、紅海をレッド海にしないで、今まで親しまれてきた呼び方になっている。

あははは、誰も「レッド海」にしようなどとは言っていないような気がするのだが。本当は発音に合わせて「レッド海」と言うべきなんだけど、ここは慣用に従って……、という議論自体が、地図帳作成者の独り相撲だと思う。

また56頁の(7)には、

中国・朝鮮の表記も現代かなづかいによらないで、発音どおり長音符号を用いているが、これは漢字のルビを表現したものではなく、地名そのものと考えてもさしつかえない。

と書いてある。もう一タツツコミを入れるのにも疲れてきたが、みなさんこれ、何が言いたいのかわかりますか？ ここは、現代かなづかいと外来語表記の原則に従って「オオクランド」を「オークランド」と書く、という文脈上にある。それが中国の地名だとうしてこういう話になるのかと言うと、例えば「山西」に音読みでルビをつけるならば

さんせい、

と書き、「さんせい」とは書かない。一方これをカタカナ現地音で表記するなら

シャンシー、

と書き、「シャンシー」とは書かない。つまりこれは、発音のままの

表記なんだ、だから西洋地名と同格の扱い（つまり外来語）であつて、あくまで漢字とは切り離れたものなんだ、発音<sup>イコール</sup>地名なんだ、と言いたいらしいのである（たぶん<sup>26</sup>）。もうとにかく漢字を排除したくて仕方がないらしい。

こうしたカタカナ現地音に対するいじらしいまでの細かいこだわり、そして世間の常識からのズレは、今日の我々から見るとなかなか面白いのである。他にも興味深い記述はあちこちにある。機会があれば皆さんも是非読んでみていただきたい。なかなか笑えますよ。

## 五、教科書研究センターによる地名表記の手引き

次はcの資料である。aの資料が文部省から直接発行されたものであり、bの資料は各教科書出版社から発行されているものの基本的にはaの文部省の資料の転載であつたのに対し、cの資料は財団法人教科書研究センターによる編著となつた点が大きく異なる。同センターからは、

c-1 『地名表記の手引』昭和五十三年（図5）

c-2 『新地名表記の手引』平成六年（図6）

の二種類の「手引」が発行されており、c-1では「地名表記の手引」作成連絡委員会委員として、c-2では『地名表記の手引』改訂調査研究会委員として、文部省の担当者の方々も名を連ねておられる。当然文部省の意向の元に作成されたものではあろう。しかしc-1、c-2共に、作成委員や改訂調査委員には、各省庁の関係諸氏や大学の研究者諸氏以外に、出版社の方々や小中高の先生方も参加な

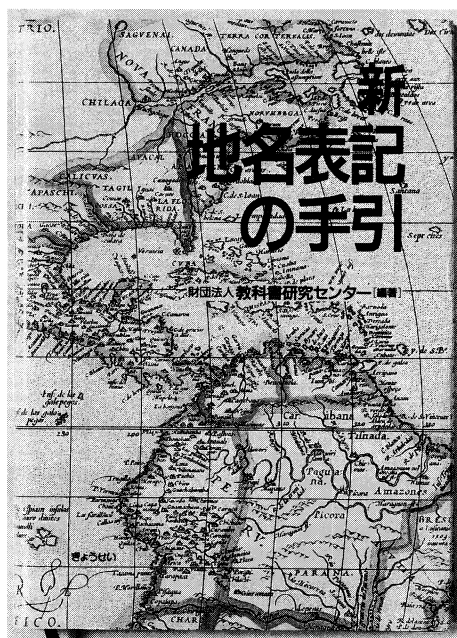


図6 『新地名表記の手引』

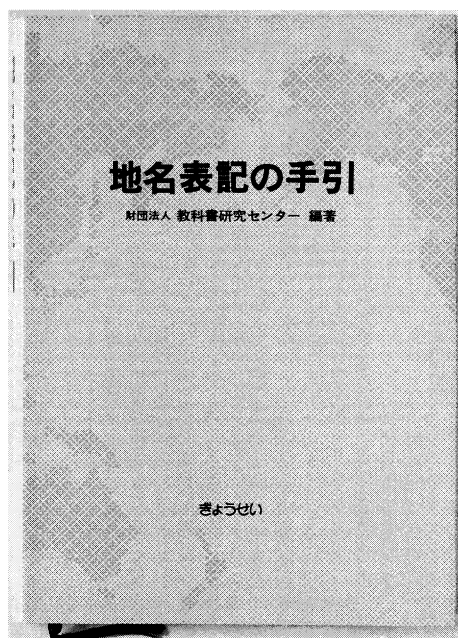


図5 『地名表記の手引』

さっている。つまりこの資料は、教科書を作る人々使う人々の手にも編集と著作がゆだねられたのだと考えてよからう。

では資料cは資料a bと比較してどこがどう変わったのか、これから見て行こう。分かりやすくするために以降は必要に応じて、

資料a-2を a-2 (文部省)

資料c-1を c-1 (センター旧版)

資料c-2を c-2 (センター新版)

と、それぞれ呼ぶこととする。

c-1 (センター旧版) の「はしがき」(1頁)に言う

この文部省の手びき書(資料a-2を指す)は、既に絶版となつてからかなりの年月を経ているが、その間に、世界の国の数も倍増し、地名そのものの変化があつたり、地名の呼び方や書き方にも再考を要するものが出てきた。そこで、時代に即応した新たな地名表記の標準を示そうとしたのが本書である。

本書の作成に当たっては、関係各官庁、社会科教育研究団体、大学、報道機関、教科書発行社等に委員を委嘱して、地名表記の手引作成委員会を組織し、昭和五十二年七月以来、一か年にわたる審議を経たものであり、各位の御協力について、深く感謝するものである。

まずa-2 (文部省、昭和三十四年)が発行されて後二十年間の国際的社会状況の変化を受けて、現代に通用する地名に改訂しようということ、そして文部省による直接の編纂ではなく、教科書研究センターという財団法人が独自に編集したものだということを、ご確認願いたい。

さらにc-2 (センター新版) の「はしがき」(1頁)に言う。

当センターは、昭和53(1978)年7月に関係者のご協力を得て、学校における児童・生徒の学習指導の用に供するため『地名表記の手引』を作成した。その後、世界情勢は著しく変動し、国名・都市名などに変化が生じ、これに対応して日本新聞協会からは、平成元(1989)年7月・『外国地名の書き方・改訂版』(新聞用語懇談会編)が刊行され、また、日本放送協会からは、平成4年3月・『NHK ことばのハンドブック』(NHK放送文化研究所編)が刊行され、『外国語・外来語のカナ表記——用例集』を取り上げた。

なるほど、ここに名前を挙げられたマスコミの資料も、カタカナ現地音化の経緯を広く知る上で重要な資料となるはずだ。いずれ改めて検討の対象としたい。

平成3年6月28日、内閣告示第2号において「外来語の表記」が示され、同日付けで文部省初等中等高等教育局長から都道府県教育委員会教育長あてに「学校教育における外来語の取り扱いについて」通知された。(1頁)

ここで触れられている平成三年の「外来語の表記」については後で再び触れることになるので、ご記憶いただきたい。続いて、

当センターは、これらの事情に基づいて、さきの『地名表記の手引』の改訂を行うため、平成3年度教科書等調査研究に対する研究助成事業として、『地名表記の手引』の改訂に関する調査研究』について、豊田短期大学教授朝倉隆太郎氏(研究代表者)に研究を委託した。(1頁)

とある。研究費を費やして、学術的研究を経た上で、丁寧に検討され改定されたことがうかがえる。

ここで資料 a-2、c-1、c-2 の三者をやや詳しく比較検討してみることしよう。もちろんソビエト連邦や東ドイツがそのままではずいわけだから、そうした社会情勢に対応する改訂が順次なされるのは当然のことだが、それとは別にここでは、カタカナ現地音表記に関する記述に変化がないかどうか、ということに注目してみたい。

三者それぞれの掲載する第2「一般外国の地名」の「原則」を列挙してみよう。

#### a-2 (文部省) 9頁

- 1、外国の地名は、原則として、かたかなを用いて書く。
- 2、外国の地名は、なるべくその国の呼び方によって書くが、慣用の熟しているものについては、それに従って書く。
- 3、外国の地名は、なるべくやさしく、親しみやすく書く。

#### c-1 (センター旧版) 5頁

- 1、外国地名の表記は、原則として、片仮名を用いる。
- 2、片仮名書きによる外国地名の表記は、日本人にとってなるべく親しみやすいものにする。

- 3、小学校・中学校・高等学校を通じ、仮名書きの表記は統一する。ただし必要に応じ、ローマ字化した原音を書き添えてもよい。

#### c-2 (センター新版) 4頁

- 1、一般外国地名の表記は、原則として、片仮名を用いる。
- 2、片仮名書きによる外国地名の表記は、日本人にとってなる

べく親しみやすいものにする。

- 3、片仮名書きの表記は、原則として、小学校・中学校・高等学校を通じて一定する。

はいはいなるほど、と読み飛ばしておけばよさそうなものだが、カタカナ現地音表記のあまりの問題の多さに辟易し、既にひねくれている私からすれば、どうも細かいところが気になつて仕方がない。重箱の隅をつつくような屁理屈だとお叱りを受けることを覚悟の上で、やや詳しく論じてみたい。まず、ここで資料 a と c の言う「一般外国地名」は、漢字地名と非漢字地名の両方を含むことをご確認願いたい。

- 1、やさしく、親しみやすく

a-2 では第3項に「やさしく、親しみやすく」とあり、c-1 と c-2 には「親しみやすい」とある。繰り返しになるが、「親しみやすい」ということにそれほどこだわる必要があるのだろうか。「親しみやす」くするために、きちんとした理論が曲げられたりはしていないのだろうか。漢字圏の地名について、そもそも「カタカナ」易しい、親しみやすい」と単純に考えてよいものなのか。「チンチョウ、チヨンチョウ、チヨソツ」を暗記する方がよほど大変だ、ということも考え合わせねばならない。もしも、こんなカタカナ地名には親しめない、漢字の方によほど親しみを感ずるという人がいたら、どう責任を取るのか。結果的には、「親しみやすい」ということを金科玉条にして、事実上実行しているのは「カタカナ現地音表記」化ということなのだし。

- 2、小中高で表記を統一(一定)する

またセンターは、小中高で同じ表記を用いることにこだわっている

ようだが、この方針は資料 a や b に早くも示されていたことであり、本稿でも既に疑問を呈したところである。c-1 (セクター旧版) の「統一する」を c-2 (セクター新版) は「一定する」に書き換えているが、その意図は不明である。おそらく一種のお役所的用語なのであろう。この小中高の表記統一は、漢字地名に関してはやはり「漢字は廃止すべきもの、ゆえに学年に関係なく排除する」という考え方を基礎としているように思える（漢字は単に付記するだけのものなのだ）。そして私の目には、小中高を通して少しずつでも漢字を、そして日本語をきちんと教えようという努力を、はなっから放棄しようとする発言のように思えて仕方がない。小学校より中学校、中学校より高等学校と、だんだんと広い世界を知らしめて行くことが教育ではないのか。統一することのみ汲々とするのは、本末転倒というものではないのか。小中高を統一するためにカタカナ地名を作ったのか、それとも、せっかくカタカナ地名を作ったのだから小中高にそれを強制するのか、私には判然としなくなってきた。いや、そう感じてしまうのは、言葉というものの多様性を大切にしたいと願う私のひがみに違いない。

### 3、ローマ字で原音を示す

c-1 (セクター旧版) には「必要に応じ、ローマ字化した原音を書き添えてもよい」とある。しかし、歴代の地図帳では実際に「ローマ字で原音を示す」ことに相当する表記が行われなかったためか、c-2 (セクター新版) からは消えている。

但し、c-1 のこの「ローマ字化した原音」という文言は、意味不明である。「原音」が、「現地の言語による発音」ということを意味す

るのだとしたら、それをローマ字化することなどそう簡単にできるのだろうか。仮にこれが「原語の綴り」を添えるということなのだと思えば、それはあくまで「綴り」を添えたことにしかならないのであって、「原音」を添えたことにはならない（資料 b の項で既に触れたように）。ここで感じるのはやはり、これを書いた人が表記（綴り）と音声（発音）とを混同しているのではないか、という心配である。

例えば「パリ」に「Paris」と書き添えたとすれば、それは「綴り」を書いたことになるのであって、「原音」を書いたことにはなるまい。まさか発音を素直に現す「Pari」というローマ字を捏造（ねうぞう）して添えるとも言えるのか。IPA を使うならまだしも可能だろうが、それは「ローマ字」ではないし、もちろん全く現実的ではない。イヤミに揚げ足を取っているとお叱りを受けそうな気がするが、しかしながら、この文言からはやはりそのような危惧を抱かざるを得ない。

それにしても、カタカナ現地名に携わる人々は、なぜこうも表記と音声とをごっちゃにするような無神経なことを平気でおっしゃるのだろう。c-2 (セクター新版) になって削られたのも当然のことか。しかし、文言が削除されてもその姿勢に変化があったのかどうか、慎重に判断すべきであらう。英語地名ならば、私の場合中国語地名ならば、それがどこのことを、どんな発音を表しているのかまだしも理解可能である。しかし、一般には辞書も手近にないような、マイナーな言語による地名に、不正確な表記が紛れ込んでいることはないのかと思うと、甚だ不安になってしまう。いや、そうしたことに起因した表記のブレは実際に起こっている。これについては次稿で詳しく論ずる予定である。

#### 4、必要に応じて

さらに、c-1 (センター旧版) には「必要に応じ」てローマ字化した原音を書き添える、とある。考えるに、「原音を添える」(原語の綴りを添える?) ことが必要になるのは、馴染みのない地名、複雑な綴り、難しい発音といった場合以外に、現地音式のカタカナが突拍子もないもので、それまでの常識からはどの土地のことか分からない、という場合もあり得るのではなからうか。従来の常識的な表記である限りは、それほどに「必要」ではないケースも多いことだろう。ここで日本語の「マツチポンプ」という言葉を思い浮かべるのは、私だけだろうか。

さて、他にも具体的な個別の地名表記について、いくつか考察してみよう。c-1 (センター旧版) 第3「中国・朝鮮の地名」の細則5 (14頁) に次のようにある。

次の地名は、特に漢字で書き、日本の字音によって読む。

(注) (一) 内は別の呼び方のあることを示す。

華北 華中 華南

台湾 黄河 長江 (揚子江)

中国 (チungkオ) 朝鮮 (半島)

同様の件について、c-2 (センター新版) 第3「中国の地名」の細則7 (14頁) には、

江・水・河・溪などの河川を表す接尾語は、漢字で川と書く。

例 チュー川 (珠江) ウエイ川 (渭河)

タンシヨイ川 (淡水河) チュオシヨイ川 (濁水溪)

ただし、黄河・長江に限って、黄河 (ホワンホー)、長江 (チャンチアン) と書く。

ここにもいくつか気になることがある。整理して述べる。

1、中国 II チungkオ、チungkオ

世間では全く知られず、使われてもない「チungkオ」が、資料cに至ってもまだ使われていることにご注目願いたい。c-1はカッコ内を「別の呼び方」と呼んでいる。カタカナ現地音表記の基本方針は、漢字を使わずにカタカナだけで書くことであつた。<sup>(24)</sup>「チungkオ」のみを「別の呼び方」と言っているのは、これを他の地名のようにカタカナのみにするには無理がある、だからこれは別名の扱いなんだと、手引自身が認めたためなのだろうか。

c-2ではこの細則にこそ出てこないが、後の「付表1」「地名の書き方の例」の(3)「中国の地名」にはしつかり

中国 (チungkオ)

と掲載されている (147頁)。資料aで提示されて以来誰も見向きもせず、実際の地図帳にもほとんど用いられていないチungkオ (チungkオ) という表記に、手引き書だけはcに至るまで一貫して固執しているわけだ。<sup>(25)</sup>手引き書のこうしたこだわりがいかに現実から乖離しているかを示すよい例だと思われるが、笑つてばかりもいられない。これは同時にカタカナ表記の不統一を身をもって教えてくれる例でもあるのだ。

右の引用でお気づきの方もあつたであろう。実はこの「中国」を示すカタカナは、c-1 (センター旧版) では「チungkオ」に、c-2 (センター新版) では「チungkオ」になつていて、矛盾している

のである。ちなみに資料 a-2 (文部省) の時点では「チュンクオ」(16頁) となっていたことは既に見た通りだ。<sup>(26)</sup> c-1 はこれを襲っているわけだ。

もつとも、a-2 (文部省) にしても、本文は「チュンクオ」なのに、「付録4」「中国標準音の書き方」(140頁) では「中」が「チョン」となっていて、同じ本の中で矛盾している。中国のみ「チュンクオ」で定着させようという何らかの意図があったのか、或いは単純なミスか。これを資料 c と比べて整理してみよう

#### a-2 (文部省)

本文は「チュンクオ」 付録では「チョン」

#### c-1 (センター旧版)

本文は「チュンクオ」 付表では「チュン」

付録では「チョン」<sup>(27)</sup>

#### c-2 (センター新版)

本文は「チュンクオ」 付録では「チョン」<sup>(28)</sup>

ご覧のように、c-1 は a の矛盾を受け継いでいる上に、本文と付表と付録が矛盾するという a-2 よりもひどいことになっている。c-1 に至ってやっと本文と付録との矛盾が解消された格好だ。では c-1 の矛盾は何に原因があるのだろうか。参考までに、「[zhong]」[chong] [zheng] [cheng] の音節を、各資料で比べてみよう。

	zhong	chong	zheng	cheng
a-2	チョン	チョン	チョン	チョン <sup>(29)</sup>
c-1 [付表4]	チュン	チュン	チュン	チュン <sup>(30)</sup>
[付録2]	チョン	チョン	チョン	チョン <sup>(31)</sup>

c-2 チョン チョン チョン チョン<sup>(32)</sup>  
発音の異なる四つの音節をみんな「チョン」で済ませてよいものか不安になられるかもしれないが、カタカナで書き分けようというのがそもそも無理なので、仕方がない。但し、c-1 (センター初版) のみ「zhong」のカタカナがページによって「チュン」「チョン」と異なっていることが見て取れよう。単なる誤植なのかもしれないが、このあたりの混乱が「チュンクオ」「チョンクオ」のブレと関係あるような気がするのである。

今仮に、これが誤植ではなく意図されたものだったならばどうだろう。「付表」はあくまで本文の付表であって教科書センター自身により作成されたものの、一方「付録」は国語審議会による「中国人名・地名の書き方の表」(昭和二十四年<sup>(33)</sup>) を単に掲載したものである。すると、資料 c-1 の編者は、「中国」チュンクオにわざわざ合わせるために、国語審議会の古い表(付録2)を敢えて無視して、自分たちの手引き書の対照表(付表4)を「チュン」に改訂したのかもしれない。<sup>(34)</sup> いずれにしても、統一統一とおっしゃる割りに、中国語音節とカタカナ表記との対応表がこう幾種類もあるようでは、実気が重くなる。

#### 2、「黄河」と「長江」

c-1 (センター旧版) の頃はカッコ内にまだ「揚子江」を使っているが、c-2 (センター新版) になって「揚子江」は消えた。実際の歴代地図で「長江」が登場するのは昭和五十年頃のことだから、手引き書の記述も時間的にそれに符合する(c-1 は昭和五十三年刊)。そして、前稿(2)で指摘したように、現行の地図帳が



黄河（ホワンホー）、長江（チャンチアン）

になっているものは、まさにこのセンター新版の表記に従ったものだったのである。紆余曲折を経て、黄河と長江は一応この形に落ち着いたらしい。しかし今までの経緯を見ると、今後またどのように変わるか分かったものではない。むしろこの改訂の前の

黄河、長江（揚子江）

という表記が一番良かったのではないかと私は思う。良かれ悪しかれ歴史的に事実上用いられた「揚子江」の呼び名を単に削除するよりは、参考として残しておくことにも意味はあろう。地図帳を単に言葉遣いを規制するための基準とするのか、それとも将来にわたっているような事を調べられるような知識の集積地とするのか、これはそうした根本に関わる問題であるような気がする。<sup>(35)</sup>

### 3、「渭水」

右で見たc-12（センター新版）第3「中国の地名」では

ウェイ川（渭河）

となっていた。「付表1」「地名の書き方の例」(3)「中国」でも同様である(144頁)。c-11（センター旧版）も同様で、「付表1」「地名の書き方の例」7「中国（チュンクオ）」には、

ウェイ川（渭河）

とある(80頁)。ところが不思議なことに、地図帳では「渭河」を用いたものがほとんどないのである。主要な地図はみな「渭水」となっていて、カタカナ表記は「ウェイ川」である。「渭河」は手引き書にしか出てこないわけである。確かに現代中国語では「渭河」の方をよく耳にするのだが……。ちなみに、過去の地図帳では

ウェイシヨイ川（渭水）

という表記が昭和三十年代まで見られた。さらに帝国書院32/33の

ウェイシヨイ（渭水）江

や、帝国書院34/35の

ウェイシヨイ川（渭水江）

という表記もあった。「渭水江」とはあまり見かけない書き方だが、一応「渭水」を基準にしていることには違いあるまい。古い資料aでは「渭水」となっている<sup>(36)</sup>ので、歴代地図帳はこれに従い、資料cの手引き書は無視したことになる。この例など、河川名の混乱がいまだに尾を引いている例である。

さてこの資料c-11とc-12は、文科省による指針ではなく、あくまで財団法人による手引き書だから、各出版社に対してどれだけの拘束力があるのか、我々外部の人間には分からない。しかし、右で見たごとく、各地図帳や教科書の表記は基本的にこれとシンクロしているように見える。「ワンリー長城」や「ター運河」、「台中」タイツォン」などの例は各手引き書には見えないので、各出版社の判断において行われた表記かもしれない。ただ、それは細かい個別の地名表記の差異なのであつて、中国地名はカタカナ現地音表記をメインとする、漢字は添えてもよい、という根本的な表音主義は、完全に手引き書の拘束を受けていることに間違いはない。言い換えれば、漢字で書いて、読みは音読み（慣用読みが定着しているものは除いて）、という従来の常識的表記を採用した地図帳は、一冊もないのである。いや、学校の社会科地図帳だけではない。市販の一般の地図もほとんどがカタカナ現地音だ。これら手引き書にもしも拘束力がないのならば、従来の

普通の表記を見ることの出来る地図帳が一冊くらいあってもよいと思うのだが……。

以下、補足を少し。右で見たc-2（センター新版）の「付表5」

「地名の書き方 新旧対照表」には、次のような例も載っている。（旧はc-1、新はc-2を、それぞれ指す）

旧	カントン（コワンチョウ）
←	
新	コワンチョウ（広州）

旧	コワントン（省）
←	
新	カントン（コワントン 広東省）

旧版では「カントンⅡ広東」と「コワンチョウⅡ広州」があたかも同じ場所であるかのように扱われていたが、新版では市の名前であるコワンチョウ（広州）がこれと分離され、省名に「カントン」という慣用読みが復活した点で、c-1までの混乱が解消されていて評価できる（コワントン省は余計なお世話だと思うが）。その一方で、次のような例も載っているのである。

旧	コワンシー（壮族自治区）
←	
新	コワンシーチョワン（広西壮族自治区）

旧版c-1の「」は、く川、く山、く湖、く島、く半島など、手引き書の言う「自然地域を表す接尾語」を示す記号である。（壮族自治区）が接尾語というのも理解しがたいが、とにかくこのカッコを整理

すると、次のようになるのだろう。

旧	コワンシー壮族自治区
←	
新	コワンシーチョワン族自治区 （コワンシーチョワンⅡ広西壮族自治区）

いや、もちろん「広西チワン族自治区」の方が絶対よいわけだが、それでも百歩譲ってカタカナ表記を認めるとすれば、これなら旧版の方がよほどマシだったのではないか？ 新版の書き方では、これは元々「広西」省で、それが「広西チワン族自治区」になったという地名の成り立ちが全く分らないのではないか。

コワンシーチョワン族Ⅱ広西壮族自治区

という民族がいるように見えてしまう恐れはないのか？

コワンシーチョワン族の自治区

と読めてしまう恐れはないのか？ カタカナ現地音化を推し進めようとする、また新たに別の矛盾を生んでしまうというよい例であるう。

もう一つ補足。c-1（センター旧版）からc-2（センター新版）への改変の一つに、前稿（2）で指摘した「リヤ、オ」↓「リア、オ」、「チャ」↓「チア」といった類の変更有る。要するに、i介音の音節は元来大きい「ヤ」で表記されていたのだが、c-2からは「ア」で表されるように変わったのだ。なぜわざわざこのような変更を行ったのか、今まで疑問だった。「リヤ、オ」より「リア、オ」の方が、耳で聞いた中国語の発音に近いのか？ いや、私の耳にはそうは聞こえない。それに、聞こえ方など人により、話す調子により、異なるのは当

然だ。

音声学的に言えば、中国語の i 介音は比較的はつきり発音される。

中国語の「さようなら」は「再見」(Zai jian) だが、「ツアイチエン」よりむしろ「ツアイチエン」のように聞こえる。だとすると、「[iao]」についてもその i 介音の特徴がはつきり出る「リヤオ」の方が、「[ia]」についても同様に「チャ」の方が、よりよいのだという考え方もあり得るのである。なぜわざわざ「ア」に変えたのか……。

おや？これ……。まさかとは思うのだが、拼音ローマ字の綴りが「a」だから「ア」にしたのではあるまいな？

「[iao]」という表記には「ヤ」を示す綴り字がない。

「[ia]」という表記には「ヤ」を示す綴り字がない。

文字上は「a」である。

だからその綴り字に合わせて「ア」にした。

というのではないことを信じたい。表記（綴り）と音声（発音）をこつちやにするのはもう勘弁して欲しい。中国人がローマ字の綴りに従って発音するとも思っているのか。こういう大して益のない細かなこだわりが、

「リヤオ」なら○だけど「リヤオ」なら×

という悲劇を生んだことを忘れてはならない。そして今後も、

「リアオ」なら○だけど「リヤオ」なら×

という愚行を決して繰り返してはならないのである。

(続稿)

※さらに個々の地名表記を巡っては、きちんと検証しておかねばならないことがまだ残っている。この地図帳論は本稿(3)を以て一旦筆を擱くつもりでいたのだが、やむなく次稿で続けて論ずることとしたい。次稿(4)「陝西」省は「シャংশー」省か「シェンシー」省か「は、『国際教養学部論叢』第2巻第2号(中京大学国際教養学部)に掲載予定である。

注

(1)「地図帳の怪(2)——『万里の長城』はなぜ『ワンリー長城』になったのか——」『国際教養学部論叢』第2巻第1号(中京大学国際教養学部、二〇〇九)。

(2)内山完造「そんへえ・おおへえ」岩波書店、一九四九(昭和二十四)、序文「そんへえ・おおへえ」(1~3頁)。ちなみに書名の「そんへえ」と「おおへえ」はそれぞれ「上海」「下海」の上海語における「現地読み」である。

(3)『朝日新聞』東京版〇九年十月五日朝刊十二版、「声」掲載「中国の地名や人名は漢字で」。なお同紙東京版にこの投書が掲載されたことを教えてくださったのは、同人誌作家の気楽院氏であった。この場を借りてお礼申し上げる。

(4)『朝日新聞』と言えば、「毛沢東」<sup>マオツォーデン</sup>「鄧小平」<sup>トシツァオピン</sup>「江沢民」<sup>カウゼンミン</sup>「胡锦涛」<sup>フージュ</sup>というルビが同紙で使われているのを私が初めて見たのが、〇三年二月十二日の朝刊だった。また大型掲示板「2ちゃんねる」に相次いでアサビーが中国関係も現地読みをはじめますた。

朝日新聞が俄に、中国の人名にも現地読みを併記し始めた。

という書き込みがあったのも〇三年の二月である。紙面では、この頃から既にカタカナ現地音表記を導入しておられたようである。

(5) 注(1)参照。さらにその基礎となった前稿

「地図帳の怪——中国地名のカタカナ表記の功罪」『文化科学研究』14 12(中京大学文化科学研究所、二〇〇三)

「社会(地理)——中国地名・カタカナ表記の怪」『と学会レポート オタク的中国学入門』(楽工社、二〇〇七)所収

「ター運河」とは、俺のことかと『大運河』言い…… トンデモ化す

る社会科教材のカタカナ現地音表記」(『と学会誌』17号、二〇〇六)も参照されたい。

- (6) 細則10の(一)英語に、次のようにある。

エ 語頭のYe, Jeは「エ」と書く。

[例] Yellowstone エローストン(イエローストン)

Jerusalem エルサレム(イエルサレム)

例外 Yemen イエメン(イエーメン、エーメン)

- (7) 資料c-2の「地名表記の手引」改訂について(三頁)には、資料a-2の編纂を巡って、「例えば、A社の教科書にヘーグとありB社の地図帳にハーグとあることは、児童・生徒の学習に障害となっているものである」という記述がある。

- (8) その前、第2「一般外国の地名」の「原則1」にも、

外国の地名は、原則として、かたかなを用いて書く。

と明記されている(9頁)。この「外国」には中国・朝鮮も含まれていることが、この第3でも改めて宣言されているのである。

- (9) 「付録」4、中国標準音の書き方。昭和二十四年七月三十日国語審議会総会で議決、文部大臣に建議された「中国地名・人名の書き方の表」を使いやすくするために、文部省調査普及局国語課で増補したもの、とある。

- (10) 但し、「付録4」と「付録5」の順番が資料a-2と逆になっている。

- (11) ここは「地名の呼称」と書いてあるから発音が本体なのだと叱られそうな気がする。しかしそれは当たり前なのであって(だって呼称とは呼び名のことだもん)、その「呼称」を「表記」するのに漢字・仮名・ローマ字・IPAなど様々な文字記号があるのである。もちろんその「表記」を仮名のみに限定する理由などどこにもない。「呼称」と「表記」をこっちゃにした記述である。

もっと分かりやすく言おうか? 呼称とは声に出して呼ぶことだから仮名を使う、というのは成り立たないということだ。そんなことを言い出したら、人間が声でコミュニケーションを行う以上、この世で表音文字しか使っていないということになりはしないか。地図帳の日本のページも全て漢字無しのひらかなにしなければならなくなるぞ。え? もしかして、地名というのは元々話し言葉の中で音声として発せられて

成立するのが先だから音声が本体だ、と言うのか? それもおかしい。土地の人が自分たちの住んでいる場所の名前を決めるのに、先に文字だけ決めておいて後から読みを考える、なんてことはなくて当たり前だ。たとえ当て字でも、一旦書き方が決まれば(文字面のコミュニケーションにおいて)その土地の名前として機能するのである。この段、考えれば考えるほど意味不明だ。

- (12) 第1「地名の呼び方と書き方に関する方針」(5)

(13) 余談だが、後で触れる史料c-1の(付録3)「漢語拼音方案について」(解説)では、このウェード式、国語ローマ字式、注音字母の各表記法について簡単な説明がなされている。注音字母については「その後幾度か修正されても満足な結果が得られず」と、漢語拼音方案については「三世紀半にわたるローマ字化の経験を生かし、それをまとめ、しめくくったものといつてよい」と、それぞれ述べているが、少々公平を欠くように思う。特に漢語拼音方案については、ややおもねった表現で使われている。漢語拼音方案はもちろん現在広く使われているが、重大な欠点を抱えていることを我々中国語の教員は認識しておかなければならない。これについては拙稿「現代中国語の各種音声表記について——その中国語授業の発音指導への応用」(九州大学中国文学会「中国文学論集」第21号、一九九二)を参照されたい。

- (14) c-1では第3「中国・朝鮮の地名」細則2(13頁)、c-2では第3「中国の地名」細則2(13頁)。

- (15) ユン・チアン、J・ハリデイ著、土屋京子訳『マオ 誰も知らなかった毛沢東』上下、講談社、二〇〇五。

- (16) これについては、矢吹晋「過ちを訂正するに憚るなかれ。誤解・誤訳の開き直りは許されない」『マオ—誰も知らなかった毛沢東』の著者名表記について(「21世紀中国総研[DIRECTOR'S WATCHING]」第17号2005.12.9) [http://www.21ccs.jp/china\\_watching/DirectorsWatching\\_YABUKI/Directors\\_watching\\_17.html](http://www.21ccs.jp/china_watching/DirectorsWatching_YABUKI/Directors_watching_17.html) において、既的確かつ痛烈な批判がなされているので参照されたい。

- (17) ついでに、chang / zhang は、地図帳式カタカナ現地音表記では「チャン」(小さいヤ)となる。

(18) 「歴史上の呼び方」というのが具体的に何を指すのかも曖昧だ。まさか、歴史上のその時代当時の発音をカタカナで、というのではあるまい。歴史学で通常用いられている常識的な読み方、ということか。

(19) もう一つ屁理屈をこねるなら、ここは歴史上の「呼び方」と言っている(書き方ではない)。では書く際はどうか。中国の地名は「かたかなで書く」(資料a)ことが大前提ならば、書く時も、清朝以前は漢字無しで「らくよう」と書けということか。ちなみに、後で触れる資料cの本文からは、この「歴史上の地名」の規定が消えている。

(20) 清水書院『詳解世界史B』H6/7にはこんな例もある。蒋介石については

上海の江蘇・浙江系財閥(浙江財閥)とアメリカ資本に支えられていた。

とあり、これに連続して毛沢東については

一九二七年に南昌などで蜂起したのちに……(中略)……一九三一年に瑞金で農民に基盤をもつ中華ソヴィエト共和国をたて、とある。よく見ると、蒋介石の国民党側の記述では、

こうぞ せつこう

と音読みでルビが振ってあり、毛沢東の共産党側の記述では、

ナンチャン ロイチン

とカタカナ現地音でルビが振ってあるのである。いくらなんでもこれは芸が細かすぎではないか。

また、この教科書だけのことではないが、蒋介石には「しようかいせき(チェンチェシー)」と、毛沢東には「もうたくとう(マオツェートン)」と、それぞれ二重にルビが振ってある。

なお、蒋介石のカタカナ表記は「チャン、チェシー」であり、「チェン」は単なる誤りである。また毛沢東をマオツェートンと書くのは、ローマ字表記に引きずられた読み間違いである可能性が高い(中国語では「e」を「エ」と読んではいらない)。

(21) ここは、

「現地呼称」を尊重するが、例外として「慣用」を認めるという話だったはずである。しかし例として挙げられている「イエメン」で問題になっているのは、

「エメン」ではなく「イエメン」とする

ということである。しかしこの「エメン」は「現地呼称」でも何でもない。「手びき書」特有の書き方であるに過ぎない。現地呼称に対する例外なのか、「手びき書」の原則に対する例外なのか、どうも記述が混乱しているようである。

(22) 本来の正しい日本語は、「沿海州をプリモルスキーにしたり、紅海をレッド海にしたり」であろう。「たりたり」の呼応を無視するという誤用は、この時代に既に始まっていたらしい。

(23) このすぐ後には「(わが国の地名の)かな書きは現代仮名づかいによるか、発音のままにするかについてはいろいろ意見もあるが」と断りつつ、

「天津」は「おおつ」として「おーつ」「おうつ」とはしない。

と書いてある。「発音のまま」だと「おーつ」「おうつ」になる、という認識である。ならば「ニンテンドー」とか「イトーヨーカドー」などの書き方も発音のままなのだろうか。むしろ外来語の表記に準じた書き方で外来語っぽさを出すという効果の方が大きい気がする。この(7)の項目が言いたいのは、長音記号を使うことは現代仮名遣いよりも外来語表記の規定の下にある、ということなのかもしれない。

(24) 昭和二十四年の国語審議会「中国地名・人名の書き方の表」にはつきりと、「中国の地名・人名は、かな書きにする」「当分の間、漢字をあわせ示してもさしつかえない」と記してあったことを思い起こしていたきたい。

(25) 実際の地図帳では、昭和二十年代に「チョンホワ(中華)民国」が何度か用いられた例はある。

(26) 資料a-1も「チュンクオ」となっているが、a-1は基本的にa-2の主要部分の抜き書きだから当然だ。

(27) 本文第3「中国・朝鮮の地名」(14頁)では「チュンクオ」、「付表1」 「地名の書き方の例」7中国(チュンクオ) (80頁) 及び「付表4」 「中国拼音と仮名書きの対照表」(115頁)では「チュン」、「付録2」(4) 「中国地名・人名の書き方の表(便覧)」(192頁)では「チョン」。

(28) 「付表1」 「地名の書き方の例」(3) 「中国の地名」(147頁)では「チョンクオ」で、「付録2」 「地名表記に関する重要資料(一部抜粋)」(1)

中国地名漢字・ローマ字・かな対照表」(212頁、220頁及び245頁)では「チヨン」となっている。

(29) 「付録4」 「中国標準音の書き方」

(30) 「付表4」 「中国拼音と仮名書きの対照表」 (太字明木)

(31) 「付録2」 (4) 「中国地名・人名の書き方の表 (便覧)」

(32) 「付録2」 (1) 「中国地名漢字・ローマ字・かな対照表」

(33) タイトルには「中国地名・人名の書き方の表 (便覧)」 昭和二十五年とあり、

昭和24年7月30日国語審議会で決議、文部大臣に建議された「中国人名・地名の書き方の表」を使いやすくするために、文部省調査普及局国語課で増補したもの

との説明がある。

(34) 但し「中 (zhong)」については他にも混乱がある。「台中」だけがなぜか、

タイチヨン (新詳61/62、中学52/53まで)

タイチユン (標準・新詳62/63、中学55/56から)

タイツォン (標準・新詳H9/10から) (いずれも傍点明木)

のように、「中国」とはまた別の変化をたどっているのである。「中国」の「中」と「台中」の「中」、いずれも同じ発音で、本来区別する必要は全くないはずだ。しかし「チヨン」→「チュン」の変化は「中国」の場合と逆順だし、「ツォン」は手引き書・地図帳共に他に例のない書き方である。まさかとは思うが、捲舌音<sup>けんそうおん</sup>をあまり使わない台湾の人から中国語を習った人が、このカタカナの改訂を行ったのか (それなら確かにツォンに近い)。でも、それはおかしい。現地音とは地方の方言や訛りのことを言うのか (それなら鹿児島は「かごんま」、沖縄は「うちなー」と地図に書かねばならなくなる)。手引き書にも「中国語の標準音」と何度か書いてあったことだし、なぜ歴代の手引き書や地図帳が「中」の字のみ不安定な状態になっているのか、理由は分からない。

(35) 私の学生によると、彼の弟は「チャンチャン」は知っているが、「揚子江」は見えたことも聞いたこともない、と言っていたそうだ。

(36) 資料a-1では2頁の右、a-2では第3「中国・朝鮮ならびに樺太および千島の地名」5 (18頁)、及び「付表1」VII「中国」(76頁)。